

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

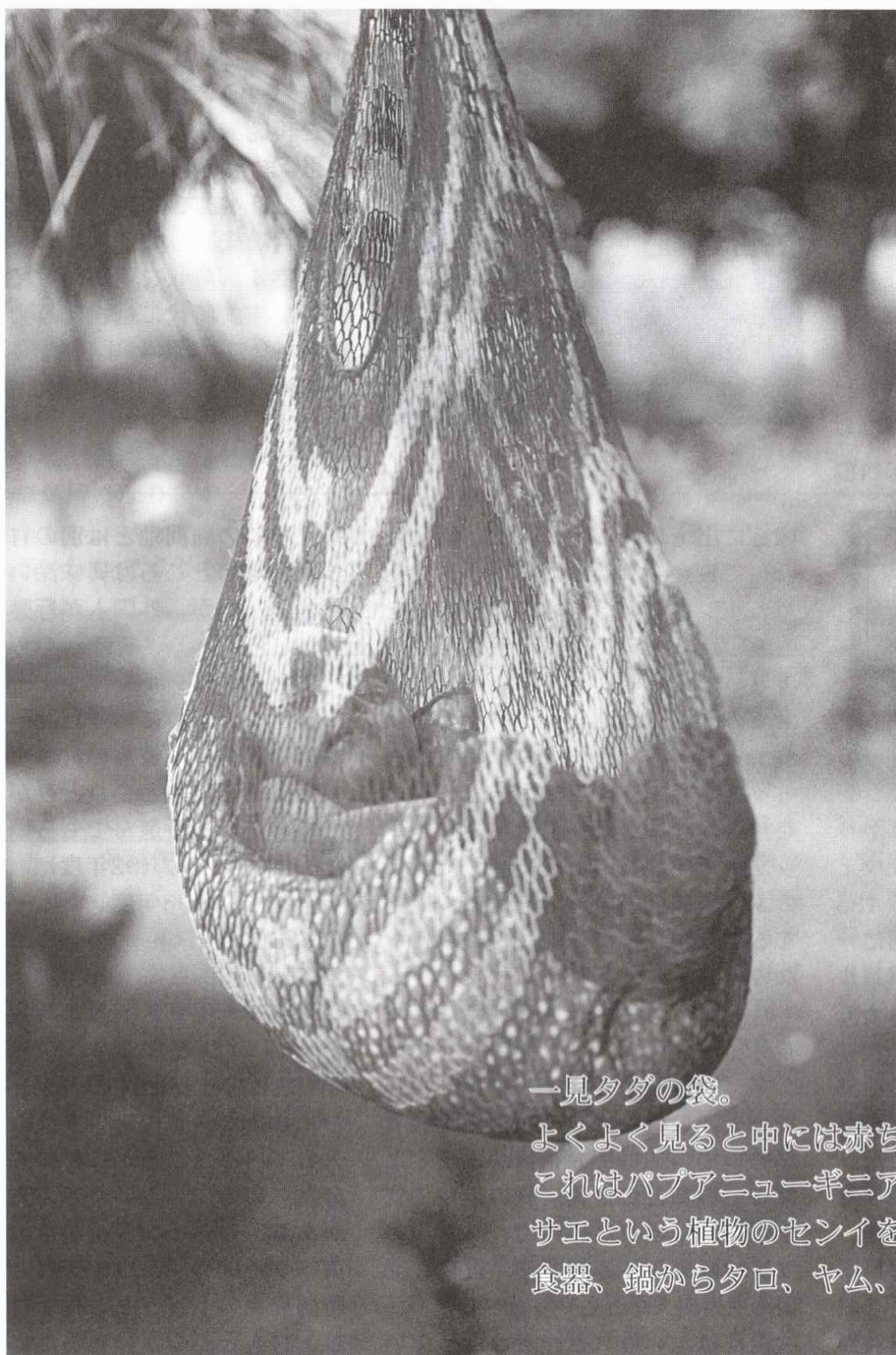
80

2001・9

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
e-mail phd@po.hyogo-iic.ne.jp
定価：100円

- 岩村昇理事に聞く「時代に抵抗する力」・・・ 2P
- 研修生レポート・・・ 4-5P
- 古参職員フジノに聞け！
スペシャル「フジノ、アメノモリ氏に聞く」・・・ 3・6P



一見タダの袋。

よくよく見ると中には赤ちゃんが。

これはパプアニューギニアの手づくり袋、ビルム。

サエという植物のセンイをよって作った糸で編む。

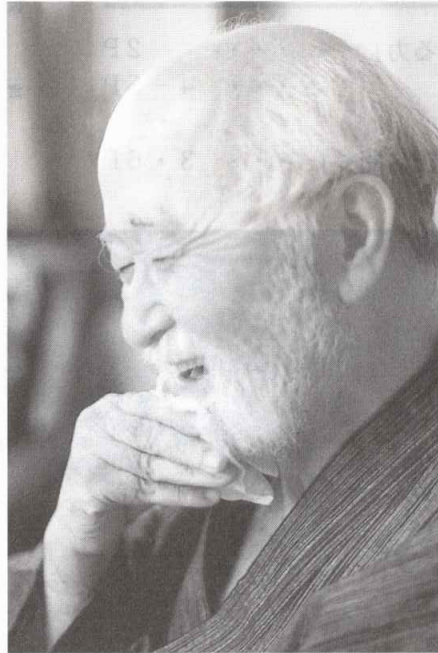
食器、鍋からタロ、ヤム、バナナ何でも入る万能袋。

パプア・ニューギニア、フィンシャーフェン 撮影：FUJINO T.

原爆症による体調不良から現在は第一線を退かれているPHDの提唱者、岩村昇理事。兵庫県三木市のご自宅を久しぶりにお訪ねしました。当日はお元気そうでした。インタビューは2時間にも及びました。編集部

時代に抵抗する力

岩村昇理事に聞く



2001.7.16 撮影 F.T

PHDの活動を皆さんに呼びかけて20年がたちましたが、世界の状況は決して良くなったとはいえません。むしろ、ところによっては厳しくなったところもあります。だからこそPHDの基本的な考え方はより必要とされるのだと思います。ただ、20年前と今とでは状況の変化がありますから、それに応じた細かいところは変えなければいけません。

研修生の村の問題も少なくないですが、むしろ、日本のこれからが心配です。このままでは、滅んでしまうのではないかと思います。子が親を、親が子を殺すなど、命の尊さが失われた社会になってきています。いい学校、一流企業だけが評価される社会、共稼ぎが必要となる暮らし、老人が取り残される世界。こういったことに気づいた人が声をあげなければいけません。

その解決のヒントはアジアや南太平洋の草の根の人たちの"Simple Living"つまり質素な暮らしにあると思います。質素な暮らしは心を豊かにします。

しかし、日本の中にも今の世の中のおかしさに気づいて、もうひとつの生き方を始めている人たちがいます。例えば町から村に入り、農業を始めている人たちがいます。その多くは有機農業をしておられます。その環境に育つ子供は違う価値観を持つことができるのではないのでしょうか。

日本にやってくる研修生にはこういう方々に出会い、日本の変化を学んでもらう、農業の素晴らしさ、尊さを再認識してもらうことが大切だと思います。農業に誇りを持つよう、研修を組み立てることが大切です。

時代を先取りする人は、いつも少数派です。時代を追いかけてはだめです。時代に抵抗する力、哲学を持たなければいけません。

これが私の20周年を迎えての思いです。 談

古参職員フジノに聞け！スペシャル「フジノ、アメリモリ氏に聞く」

〆PHDを評価する〆

日本にNGO/NPOの活動が定着する一方で質が問われるようになってきました。そのために「評価」が重要となってきています。PHD協会も内部評価にとどまらない第三者による評価をアユス=仏教国際協力ネットワークの助成をいただいて昨年実施しました。その評価担当者である雨森孝悦さん（当時フリーランス、現日本福祉大学経済学部助教授）にお話を伺いました。

今回と次回2回にわけてお伝えします。

フジノ（以下フ）：自分たちだけの評価、振り返りではなく、第三者から客観的に見てもらうことがいい活動を続けて行くためには必要だと思っていました。

雨森（以下雨）：PHD協会は20周年を迎えたわけですね。その間世界はグローバル化が進み、経済環境も変化してきているわけですから、アジア南太平洋での地域づくりも今までと同じやり方をしているのか、それとも違う方向に進んでいくのかを考えねばならないわけです。そのためにはそれを支援する組織が良くなるかといけません。組織の成長を阻害する要因があるのであれば、それを取り除き大きく伸びるようお手伝いをしたい。評価といっても、点数をつけるのではなくマネジメントに役立つ情報を提供する支援型評価をしたいと考えていました。

フ：国際協力という業界でいつ頃誰が、「評価」と言い始めたのですか？

雨：日本における国際協力の分野で言えば、少なくとも80年代前半にはJICA（国際協力事業団）の企画課が評価の資料を集めて検討し始めていました。欧米では、70年代です。アカウンタビリティと関係があるのですが、NGOは、会費・寄附をもらって事業を運営しています。その際事業の結果を報告する責任があるわけです。これを果たす上で評価が大事になってくる。勝手な報告をしては意味がない。

振り返り程度ならどこでもやっているのですが、評価をどこまで体系的にやるのか、やって得た情報をどう活用するかが問題です。例えば、ワンマンの組織なら、それを押さえ込む

かも知れないし、内容を曲げたりしがちです。評価結果を事業運営に生かさないのでは意味がありません。

フ：支援者に対して責任がある。そこですか？

雨：会費を払ったり寄附をする人も成熟してきたので、当たり前のことですが、都合のいい情報ばかりではなく、うまくいかないところもあるはずだと思いついてはいます。このうまく行かないところを説明できれば、継続した支援をしてもらえるようになるんじゃないですか。

フ：そもそも評価の手法のルーツはどこですか？

雨：日本では、アメリカから入ってきたものが多いです。PCM（プロジェクトサイクルマネジメント）のようにオリジナルはドイツですが日本が改良したものもありますけど。90年代半ばに自治体・行政で事務事業評価が始まりました。財政が乏しくなると少ない予算をどう分けるかを考えねばなりません。やめるもの、残すもの、もしくは伸ばすものを決めなくては行けない。ある基準に基づいてそれをやるわけですが、その重要な手段が評価です。

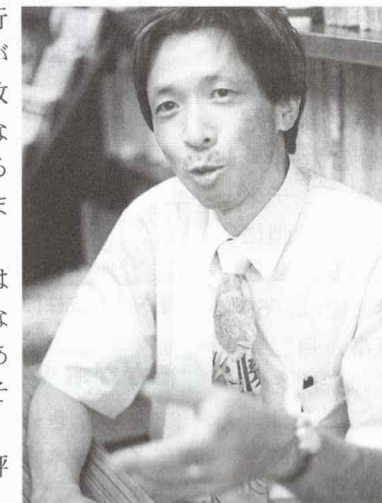
フ：その場合、誰が評価をするのですか？

雨：内部の人がほとんどですね。第三者評価はあまりないと思います。第三者の役割は、客観性を確保することと、内部の人がなんとなく感じてきた問題点やその原因を言語化することです。現場の人たちは、だいたい問題点に気づいているのですが、形にしたものを提示して、それをも

とに議論した方が後の展開がしやすいですね。

しかし、きちんとした評価を行い、問題点が明らかになっても、結果を実際の改善に生かすかどうかは、最終的には政治的意志にかかってきます。その意志がなければ、いくら評価してもだめですね。下手をすると、評価はうまくいっていないものを成功しているかのように見せかける自己正当化の道具になりかねません。そういう意味でも第三者を入れていいねいを実施する必要があります。たとえば、事業実施者が都合のいいように調査地を選ぶのではなく、評価者が自分の判断で選べなくてはなりません。そうでないと出来合いのストーリーにはまってしまふ恐れがあります。「若干の問題はあるが、おおむね順調に推移している」というように。

フ：そうですね。でも、それってよくある話ですね。ところで、アメリカとかの評価の手法を持ち込んだのは誰ですか？



雨：JICAなどの人が勉強会をし、その成果を本にするという形でした。開発のコンサルタントやNGOの人たちも勉強していました。

フ：行政が評価をはじめ、NGOも気にするようになってきたわけですね。

雨：NGOは外から言われなくても自分たちは良い仕事をしていると思いたいから、本当にそうなのかということをきちんと検証する。専門家の集団としてそれなりの職業倫理を持っているという動機もあると思います。

フ：代表的な手法はどのようなものがあるのですか？（6ページに続く）

東西南北 問題解決 取組日記

5月×日

次年度の人選とフォローアップのため東北タイと北タイへ。カラシン県のクッタカイ村では帰ったばかりのノパドンさん（00年度）とサウエーさん（91年度）、ワラヤさん（88年度）に加え、町での農民運動に一旦区切りをつけて村に戻ったバムルンさん（89年度、短期）をまじえて話し合う。

これまでの研修生の帰国後の活動の評価の話になり、バムルンさんから、もの足りないとの意見がでた。掲げる目標がはっきりしておらず方針と戦略が弱いとの指摘があった。農民運動の推進役としての彼の目から見れば、歯がゆいのだろう。これに対しサウエーさんは、それはわかるけど、家族を食べさせていく役割を背負った上での、変化に向けての取組は、口でいう程簡単じゃない、と反論。サウエーさんは一時期、出

稼ぎに出ていることもあり、活動家として資金を外から得てやってきたバムルンさんとの立場が違うことを強調した。農業で一家を支える生活者としての立場がまずあって、その上での改善への取組みがあるのがサウエーさんやワラヤさん。給料をもらって開発を行うワーカーとの違いを押さえないと効果的なフォローアップができないことを実感した。このふたつの立場の違いをうまく調整することがフォローアップのひとつなのだろう。

6月〇日

ネパール王室で痛ましい事件が起こった。これによって毛沢東主義者が勢いづいていて、世情が不安定となっているとの情報。旅の道中の安全が保障しきれないので、7月末のツアーは来年に延期することに。元研修生の何人かともやりとりしたが、大混乱はないけれど、どうなっているかはわからないとのこと。

6月△日

新しい招聘先の調査のためビルマ

へ。昨年訪問地とは別の村をふたつ。昨年のところは興味深いところではあったが、外国人が行動しにくいところであり、日本からの継続した支援には難しく、マンダレー近くタダインシェ村に帰った元研修生と相談した結果、彼らの村から遠くなく日常的に彼らとやりとりが可能となる場所を2ヵ所選んでもらい訪問した。ウィンさん（92年度）、トゥンティンさん（93年度）、ムームーさん（93年度）、トゥントウンさん（94年度）カインさん（96年度）たちはミャンマーキリスト教協議会のプログラムのひとつであるURBAN RURAL MISSION (URM)に参加してきたが、このプログラムを受け入れているところが「村づくりを自分たちの力で」という考え方の理解がある。タダインシェから自転車以南へ1時間のイエヴォテ村と車で1時間程東のトゥンダン村で村をまわり、村人と話し合いをした。いずれも農業を主とする人口2000人程の村。イエヴォテ村がより貧しく感じられた。来年人選、再来年研修生招聘のスケジュール。

研修生レポート

19期生 (2001.4月中旬～8月上旬)

アルウィ・ファドリさん
(インドネシア、男性、28才)

- 農業研修—
- 1.<神戸市西区> 渋谷富喜男
 - 2.<氷上郡春日町> 中野宗嗣
 - 3.<篠山市> 松尾誠
 - 4.<養父郡大屋町> 金谷昌高
 - 5.<島根県瑞穂町> 岩根英則、中川克敏 —滞在・アレンジ—日高久志 (敬称略)

ケウン・カヨタさん
(タイ、男性、28才)

- 農業研修—
- 1.<神崎郡市川町> 牛尾武博
 - 2.<神戸市西区> 渋谷雅弥
 - 3.<篠山市> 松尾誠
 - 4.<豊岡市> 西沢泰裕
 - 5.<小野市> ふえろう村塾
 - 6.<島根県木次町> 田中利男、佐藤忠吉 —アレンジ—日高久志 (敬称略)

ナロンテツ・カムヌーンパナドーンさん
(タイ、男性、20才)

- 農業研修—
- 1.<神戸市北区> 藤井誠次
 - 2.<宍粟郡波賀町> 田中五郎
 - 3.<篠山市> 松尾誠
 - 4.<氷上郡氷上町> 吉田吉彦
 - 5.<島根県弥栄町> 白浜松喜 —アレンジ—日高久志 (敬称略)

シコン・ドンさん
(パプア・ニューギニア、女性、22才)

- 農業研修・保健衛生・保育研修—
- 1.<氷上郡市島町> 橋本慎司
 - 2.<朝来郡和田山町> 大森昌也
 - 3.<篠山市> 小前芳彦
 - 4.<西宮市> はらっぱ保育所
 - 5.<高砂市> 兵庫県高砂健康福祉事務所、高砂市福祉部健康課 —滞在・アレンジ—神吉道子、樋野泰弘・素子 (敬称略)

国内研修生

笹間郁子さん



伊丹市在住・北海道民歴3年・27才
弱点：暑さ
はじめまして。6月から11月までPHDで研修させていただくことになりました。開発教育に関心があり、ワークショップやNGOの運営・啓発活動について全般的に学びたいと思っています。現在は、20周年事業とホームページの準備に主に従事しています。事務所で、そして20周年事業で多くの会員及びボランティアの皆様にお会いできるのを楽しみにしています。

帰国研修生短信

—北タイ—

フリチャーさん (85年)
メーサリアンに新店舗オープン。地下1階、地上3階(屋上含む)の立派な建物。年中無休のお店に加え、養鶏や養豚等もやっているため、奥さんと共に多忙な日々を送っています。

アンボンさん (97年)

引き続き、親の田畑の手伝い、養鶏、養豚、“農業の友”という名の店で化学肥料、農機具、飼料などを売っています。車のローンや生活費などを差し引くと一ヵ月の収入は約20000パーツ(約56000円)程だそうです。

ハリポーさん (99年)

今はチェンマイを拠点にして、時々村へ出入りする生活。ムシキーにあるグループによる20周年記念行事用記念品作りの中心的存在となっています。現在、妊娠6ヶ月。

ブンシーさん (2000年)

実父が1週間かけブンシーさん及び布のグループのために家を建ててくれました。ミシン(足踏み&電動)も購入し、年配のメンバーたちとも大変打ち解けた様子で、記念品作りをがんばっています。

—東北タイ—

ワラヤさん (88年)

小学生と幼稚園の2児の母。帰国後、今が一番気分的に楽とのこと。教員試験を受けながらも、農業で自活を図っています。婦人グループの会計

やマラリア対策のボランティアにも関わっています。

ノバドンさん (2000年)

帰国後、農民運動のリーダーであるバムルン氏の有機農業の取り組みを手伝っています。15a程の畑でトマトやナスや食用の花などを有機栽培で作っています。農機の修理にも取り組んでいきたい、と話していました。

サウェーさん (91年)

長男が学校を卒業し村に戻っています。農業を堅実に継続。肉牛の飼育にも力を入れており、現在では7頭の世話をしています。

—ビルマー—

ウィンさん (92年)

NGO、CAREの職員で、HIV対策の仕事に当たっています。国内外を飛び回る生活で、10月の記念式典に来日予定でしたが、海外出張のため都合がつかずかわりにトゥンティンさんに。

ムームーさん (93年)

引き続き幼稚園で保母さんをしています。この1月に新校舎が完成し、今は2～5才児を40人程預かっています。

トゥントゥンさん (94年)

マンダレーの大学に在籍中。農業をやりながら、塾を開き、20人程の生徒に英語や数学を教えています。今年の2月に結婚しました。

日本語研修終了!



日本語研修の1コマ

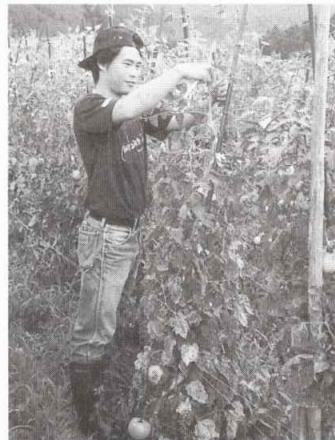
「日本語は難しいけれど、勉強は楽しかったです」とは日本語研修を終えた研修生たちの感想です。4月中旬、来日してまだ間もなく、日本の生活にも慣れていない時期に始まった6週間の日本語研修。様々なとまどいや不安を感じながらの毎日だったでしょうが、経験豊富な神戸YMCAの先生や数多くのボランティアの方々に支えられ、今年も順調に終わることができました。6月2日に行われた初めての交流会では、60名近い参加者の前で、無事、自己紹介や出身地域のスライドの説明をすることができました。

「百聞は一見にしかず」

6月からは、それぞれの興味、関心に合わせた現場での研修が始まりました。3名の男性陣は農業、紅一点のシコンさんは農業、保健衛生、洋裁をこの一年で学ぶ予定です。

6週間の日本語研修を終えたとはいえ、まだまだ込み入った話のできる段階ではありません。そこで、研修生の最初の研修先は、見ることや作業することによっても比較的多くのことを学ぶことのできる農家の方々のところになります。

実際に受け入れて下さる研修指導者の方々も「言葉のことはあまり問題にならない。研修生も農業のプロだから、一緒に農作業をすればそれぞれが自分の判断で色々学び取ってくれている。また、草引きや鎌の使い方など彼らの方が上手なこともたくさんあり、互いに学び合っているという感じですよ」とおっしゃっています。



トマトを支柱にくくるナロンデツさん

たかがポット、されどポット

アルウィさんの最初の研修先は、昨年インドネシアスタディツアーに参加され、アルウィさんの選考にも立ち会って下さった渋谷さんのところ。実際に現地を見ていただいたからこそできる話やアドバイスを受けられ、有意義な研修となりました。

例えば、インドネシアの苗用ポットはズン胴型で、植える時に逆さまにしたりしても苗を取り出すことができないためカッターで切ってしまう。つまり使い捨て——。日本のものは底の方が細くなっているのでスルッと取れ、再利用ができる。ちょっとした形の違いで、使い勝手

に大きな差があることを知ったアルウィさん、「日本から持って帰って使いたいです。そして、インドネシアでも拡がればいいな」と話しています。



「このポットはいいですねー。」

養鶏の魅力

研修生の村に共通することの一つとして、「鶏は基本的に放し飼いで、卵は取らずにヒヨコを育て肉用にする」ということが挙げられます。

研修指導者の多くが有機農家で、稲作や野菜作りと共に平飼い養鶏をされています。そのため、研修生は皆一緒に、肉だけでなく卵も取り、それを売る、ということに強い関心を覚えるようです。

「ビタミンやカルシウムなどが取れるように色々なエサをあげることが大切とわかりました。村で手に入るものを考えてやってみよう」とはナロンデツさん。

乾季にはほとんど雨が降らず、用水路や川の水が干上がってしまうタイ東北部出身のケウンさんも、その現状を冷静に分析し、「村に帰ったら、水があまりないので野菜は大豆とトウモロコシに絞り、そのクズをエサにできる養鶏を始めたい」と抱負を語っています。



ケウンさん、キャベツの収穫中

おもしろいこといっぱい!

好奇心旺盛なシコンさん。上記と同じく養鶏には、小屋の中の鶏糞がそのまま畑の肥料として使え、クズの野菜はまたエサとして鶏へ戻るというサイクルに感動。

大森さんのところでは、農業を始め、パン焼き、炭焼き、養蜂、バイオガスなど自給自足の生活に見られる様々な工夫に興味津々。

そして、ごはんの前に手を洗うこと、栄養のバランスや有機農産物を使って体に良いご飯を作ること、昼寝をさせること、上手な叱り方などはらっぱ保育所では育児に関することをたくさん吸収できました。



橋本さんから養鶏について聞く

(3ページより続く)

雨：代表的なものにはインパクト評価があります。これはプロジェクトを実施した結果、どのような成果が上がったのかを見るものです。成果はふつう、目的や目標に照らして評価しますが、目的、目標そのものが不明瞭だったり、妥当性がなかったりする場合もあります。それを検証するために、前もって目的と手段の連鎖が論理的にかなったものであるかを調べる「セオリー評価」というものもあります。人によってはclarificative evaluationという場合もあります。明瞭化評価とでも訳したらいいのでしょうか。プロジェクトのどの段階で評価するかで、事前評価、中間評価(モニタリング)、終了時評価というように分けることもできます。

フ：今回PHD協会の評価をしてもらいましたが、20年やってきた活動はいかがでしたでしょうか？

雨：PHD協会は、研修生を1年間トレーニングして元の村に帰ってもらい、地域づくりをしてもらう。これがコンセプトですよね。毎年、4人くらいの研修生を呼んできているので、帰国した研修生がかなり蓄積されています。今回、私はこうした帰国研修生がどう活躍し、どんな生活をしているのかを現地でインタビューしました。まずわかったことは、この人たちとPHD協会がずっと顔の見えるつながり、いい関係を保っていることです。このことは高く評価できます。しかし、研修生たちが日本での研修を終えて村に帰って村作りを開始したときに、その支援をPHD協会がどこまでプログラム化しているのかというと、十分組織化された展開になっていないという感じがしました。

フ：海外への協力で言えば、力の配分は調査・選考が2割、フォローアップが2割、国内での研修が6割くらいです。フォローアップとしてのプログラムは決まったものは確かにありません。作ってきませんでした。以前、孵卵機、ミシンなどを送ったこともありましたが、これはどうも

違うのではないかと物重視のフォローはやめ、我々のねらいは人の動きを作っていくということにした。また、原因解決でいくべきで、それを草の根の力でやるべし、その具体的な展開については試行錯誤しながら、今まで活動してきたわけですが、この20年間活動する中で、どんな人を研修生として招聘すればいいのか、ということがわかってきました。しかし帰国後にどのように応援するのはまだ模索中です。PHDの仕事が研修生を村に帰すところで終わるのか、どこまで関与していくのかということの線引きは難しいです。

これは、むこうの地域のことをどこまでわかっているのかにも関係するのですが、研修生の面接に行くのも、今は年に1回、しかも1週間しかないわけです。研修生の話を聞いてもそれで全てがわかるわけではありません。こうすればいいということと私たちが作れるものではないし、それはやはり村の人たちであろうと。それは間違いないのですが、その彼らが作るのをどうやったら応援できるのか、これは、公式があるわけではないです。地域によって特性があるし、カウンターパートの性格、村の様子、どんなふうに関係がやれるのか、研修生のできにもよるわけですね。というところで、模索しています。

結局、我々が心掛けていることは、研修生のやる気が萎えないように、村のために何かしようという気持ちが継続し、なんらかの行動で続いていくということを応援することです。それはお金なのか、教材なのか、トレーニングなのか、我々が行くことなのか、それを考えるのが今後のフォローアップの課題です。

雨：PHDの役割は人材育成、つまり研修ですね。何のために研修をしているかということ、研修生たちが帰国した後に日本で学んだことを活かして村の人に広めて生活を向上するためです。だとすれば、どうするのか。ひとつは、研修という枠を越えてフォローを、地域作りのところまで行うというのが選択肢としてあると思います。それならば、研修生がどこまでできるのかということが問題

になってきます。村の人は生活者であり、開発のワーカー、プロではない。その人達が自分の生活のことも、村の生活のことも考えてやっていく。これは非常に難しいですね。

フ：ワーカーを対象としている研修と、ウチの研修とは違います。PHD協会の研修生は帰国すればNGOや役所にポジションがあるような人ではない。生活を背負っている人です。村人は毎日の生活がかかっています。

雨：地域作り、村の生活向上を第一に考えるならば、プロの方が装備はいいでしょうね。組織的に物事を展開する地盤を持っていますから。それに対して、村の人は自分で村の組織化もしなくてははいけないし、自分の生活も確保しなくてははいけません。これが、2つともできれば説得力があります。NGOという外から入ってきた人にはない強さ、説得力を持ちうるわけですが、私の見た北タイ、パプアニューギニアでは、その前の段階でなかなかうまくいっていませんでした。ひとつには、PHDの目指しているところ、目標が高いということにあります。PHDは単に農作物の収益をあげて生活を良くすることを言っているわけではありません。有機農業をし、環境を守り、安全な食べ物を作り、それでなおかつ生活向上させる、これは高い目標です。

フ：しかも、自分だけではなく村全体で。

雨：そこまでのいかないのはある意味で仕方がないのかもしれない。

フ：帰った人達にこれをすぐに求めるのは酷なことだと思います。理想的な状態は、私たちもできていないことだし。どこかで、頑張っているところが見えれば、それを評価してあげたいと思います。日本での研修と今やることが直結していなくても、村の人に働きかけをしているのであれば、それはそれで役割を果たしているのではないだろうか、とか。村を出てバンコクのスラムで働いている人がいても、それはそれでいいんじゃないかと思えます。この続きは次号で。

第11期 林業体験合宿

大山は今年も暑かった・・・

今年も(財)大山振興会との共催にて去る7月7、8日に第11期林業体験合宿を開催しました。研修生3名を含む総勢15名が篠山市大山地区の下草刈りに参加しました。

作業後は研修生、参加者のみなさん共に「いい勉強になった、秋の林業体験合宿にも参加したい」という声があがり、担当者として嬉しい限りでした。今回は参加者の方からの感想をお伝えしたいと思います。

「今年もまた炎天下での作業となりました。地元のみなさんと共に横一列に広がり、頂上に向かって斜面の草を刈っていきます。慣れてくると時代劇のヒーローのように鎌で切り倒していきます(下草刈りはストレス解消にいいようです)。そうした元気があるのも最初だけで、休憩の合図の笛が鳴るとその場に座り込んでいました。でも、草が刈られてスッキリした斜面を見下ろすと、さわやかな気持ちになります。それに空気と水がおいしい所で食べるものは何でもおいしいですよ！みなさんも

秋の林業体験に参加しませんか」(長沢健史さん)

「暑さの中、正直に言ってかなりしんどい作業でした。私は斜面を登るだけで精一杯なのに、大山のみなさんはさっさと下草を刈っていきま。ご年配の方も多いように見受けましたが、作業の様子を見て『みなさんなんてパワフルなんだろう』と思いました。また研修生のみなさんの仕事っぷりもよく、それぞれが『とても楽しかった』とおっしゃっていました。子鹿が斜面を駆け上がる姿を見かけるなど、自然との触れ合いや発見、それに大勢の人と一緒に木を育てる経験など、参加した甲斐があったと思います。この秋の林業体験もかなり楽しみです。そのためにも、体力をつけてもっと山との触れ合いを楽しめるようにしようと思います」(浜口千絵子さん)

この記事を読まれた方も是非、10月下旬の林業体験合宿にご参加ください。お問い合わせは担当の伊藤公男までお願いします。

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

2001年5月	63件	2,186,183円
6月	393件	3,107,470円
7月	395件	4,131,824円
	851件	9,425,477円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼を申し上げます。今年度会費が未納の方は会費納入をお願いいたします。

また、新しく会員になって下さる方を募っております。周りの方にもPHDのご紹介をお願いします。

◆第1期生パニサレスさん逝く

82年来日の第1期生コンラド・パニサレスさん(69才・フィリピン・ラグナ州)が7月20日亡くなったとの知らせが、娘さんから入りました。日本では明石、宇和島、寝屋川などで淡水魚の養殖を学び、村へ帰っては、養殖場で働き、後進の指導

を行ってきました。ここ数年は気管支の病気で療養中でした。陽気で冗談好きだったパニサレスさん、ゆっくりお休み下さい。

◆第15期関西NGO大学は9月開講

PHD協会も加わる関西NGO協議会主催の国際理解・国際協力入門講座「関西NGO大学」が9/22・23から来年2月まで月1回開かれます。校長は今年も当会藤野。問い合わせ、申し込みは下記まで。

関西NGO大学事務局
電話06-6377-5144 FAX-5148
e-mail knc@sun-inet.or.jp

◆夏のネパールツアーは1月に延期、そしてタイはいつもの12月に

ネパール王室の事件から政情不安定となり、7月末に予定をしていたネパールツアーは来年1月に延期としました。年末の北タイはいつものように予定。

・北タイ 12/23-1/2

○月×日のPHD協会

職員 藤野 ビルマへ出張。村の訪問は中国製の自転車で、炎天下を1時間サイクリング。旬のマンゴーと熱いお茶のお出迎え。

職員 山西 20周年の協力をお願いで外まわり。加えて休日は子ども相手の野外活動お手伝い。植木の手入れも入れて、肌の焼け具合は熱帯級。

職員 納堂 タイへ出張。移動の夜行バスが出発2時間後、ギアの故障。修理を試みるも×で代わりのバスがくるまで5時間待ち。合計17時間の長旅。

職員 伊藤 林業体験合宿で篠山へ。参加者Iさん、炎天下の下草刈りで熱中症寸前の危機。しかし後日、朝日新聞に満足の投書が。良かった。

職員 古本 日本のODAで作られたスマートラのダム建設で立ち退いた住民の支援の集会に参加。1ヵ月後の現地訪問を控えての予習。

職員 芳田 前号レター作成時より新戦力マッキントッシュ、コンピューター導入。機械を手なづけ、作業ボランティア、イチロー君を育成中。

国内研修生 笹間 2ヵ月が経過。ひととおり仕事の流れ、職員の強い個性をつかみ奮闘中。20周年事業の準備は彼女がメイン。(日焼けの順)

編集協力：柿原登志夫、増本一朗、宮平ちえみ

・ネパール 1/3-1/11

◆大阪でも元研修生に会える！

毎年恒例のワン・ワールド・フェスティバルが今年は10月13日(土)、14日(日)に大阪国際交流センターで開催されます。20周年行事のために来日している元研修生が14日、11時~13時のパネルディスカッション「草の根の声ーアジア・南太平洋の村の青年のそれぞれの試み」に参加します。また、両日にわたり活動紹介ブースにも出展しています。ぜひ、お越し下さい。

◆東日本・西日本研修旅行のご案内

研修生のリーダーシップトレーニング、社会学習を目的とした研修旅行に出かけます。各地で交流会を予定していますので、お近くの方にはまたご案内いたします。

日程・コース
・東日本(11月下旬): 中部・関東地方
・西日本(来年1月中旬~下旬): 鹿児島-熊本-大分-福岡-山口-広島-島根-岡山

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載していません。